友の会だより

令和3年
3月
No.50

秋田県立博物館友の会　〒010-0124 秋田市金足鳥崎字後山 52　Tel 018-873-4121　Fax 018-873-4123　E-mail：info@akihaku.jp

令和２年度友の会活動報告

スミレ会（植物標本整理ボランティア）

スミレ会の活動は、全国的に新型コロナ感染者増加、緊急事態宣言発令のため３～５月は中止、６月から感染予防に注意しながら再開しました。今年度は高田順先生から寄贈されたホシクサ属標本を黙々と整理中です。国立科学博物館が行っているS-Net（サイエンス ミュージアム ネット）への標本デジタルデータ提供は、昨年度まで整理した残りもあり、今年度も目標1,500件を達成できました。観察会は、主に秋田市内の散策路などで行いました。いずれも晴天に恵まれコロナ騒ぎをしばし忘れて自然を満喫し、ストレス解消と免疫力アップにもなりました。秋に岨谷峡では多くの果実を観察しました。キツリフネの熟した果実に触るとパチンと音を立て、びっくりするほど早く中から種子が弾け飛んでいきました。学名は *Impatiens noli-tangere* L.、属名の *Impatiens* の意味は「我慢ができない」、種小名の *noli-tangere* は「私に触らないで」です。L.（リンネ）は、果実のこの特徴に着目して命名しました。分布は、日本では北海道から九州まで、海外では朝鮮・中国・モンゴル・ロシア・西アジア・ヨーロッパ・北アメリカです。学名も特徴が分かり面白いものばかりだと良いのですが…。例年通りに会員の一人が観察記録をまとめてくれたので、冬ごもり中に復習です。　（スミレ会　阿部裕紀子）

キツリフネの花（左）と果実（右）

古文書同好会

県立博物館の古文書同好会の仲間に加えさせてもらって５年ほど経ちます。武家文書にも関心はありますが、江戸時代人口の８割を占めるともいわれる百姓の世界を知りたくて、肝煎文書を取上げている当同好会を選びました。私は雄和の古文書解読講座にも参加しております。こちらも肝煎文書を扱っていますが両者の文書からは空気感の違いのようなものを感じています。当会の資料は主に秋田藩領雄勝郡三叉村の『茂木久栄家資料』です、雄和のそれは亀田藩下浜八田村の『鈴木家文書』です。三叉村は小安街道沿いにあります。ここには稲庭城にまつわる歴史があり、古くからの交通の要衝といえるところです。八田村は村と村をつなぐ山間（やまあい）の道筋です。また秋田藩は20万石に対し亀田藩は２万石です。両者にはこれらの違いが現われているのでしょうか。“空気感”の具体的な例とはいえないかも知れませんが、一つだけ私が目を引かれたことを紹介します。『茂木家資料』に“木津”という文字が出てきました。新堀先生の解説には　＜籾蔵の事、きっち・きっつ・きつ＞　とありました。『鈴木家文書』にも同じ言葉がときどき現われます。こちらは、困窮のため葛（くず）の根あるいはわらびの根を掘って食料にするため、でんぷんを取り出す道具として表現されています。語源を知りたくなりました。同じ肝煎文書ながら、両者の文書の形式も目的も当然違います。そのことを踏まえて、それぞれ興味深く楽しく勉強させてもらっております。

最後になりましたが、新堀先生の豊富な知識と日頃の研究成果をもとにした丁寧なご指導に対して深く感謝申し上げます。　（古文書同好会　柏谷勉）

会員が集まり、茂木家資料を解読

古文書整理ボランティア

守屋家は大友家と共に秋田藩から領内の神職の筆頭である社家大頭に任じられていた旧家です。波宇志別神社の神主でしたが嘉永６年（1853）１月４日に守屋家から出火、梵天奉納の為に前夜から泊まっていた参詣者百人余りが焼死するという大惨事となりました。その事件に続く神主守屋左源司の追放処分、養子造酒進の家督相続、神主から藩士への召立てなど、激動する幕末から明治にかけて守屋家も大きく変遷していきました。

昭和になって守屋家から秋田県に古文書類が寄せられましたが、平成26年、当時担当の畑中康博先生の指導の下、グループの作業がスタートしました。基本的には毎月第２、第４水曜日の作業ですが、令和２年度は新型コロナ感染対策のため３月から８月まで休まざるを得ませんでした。当初から何人かのメンバーが変わりながらも現在11人。個人的に言わせていただければ、現在担当の新堀先生はじめ解読に熟練したやさしいメンバーばかりで、未熟な自分としては大いに勉強になり、また助けられています。２年前、初めて博物館の収蔵庫を見学させていただきましたが、守屋家文書の多さに驚かされ、なかなか先の見えない根気のいる作業であることを認識させられました。でも、150年以上も前から眠っていた古文書類を、初めて自分が開き、名前を付けて整理していくというワクワク感がたまりません。これが活動を続ける源泉となっています。　（古文書整理ボランティア　池田史郎）

目録作成のため、古文書を解読

考古ボランティア

毎月２回土曜日に隔週で開催していた考古ボランティアの活動も、今年度は新型コロナウイルス感染拡大を鑑み当初は休止していましたが、秋には考古部門の博物館教室に合わせて再開しました。活動内容は次のとおりです。9/19・26土器製作試行、9/27土器作り教室補助、10/31薪の運搬、11/1土器野焼き補助、11/14土製耳飾り製作試行、11/28火起こしキットの修繕、3/6・27（予定）第一収蔵庫棚の整理。私が受け持つ「土器作り教室」も３年目、ボランティアの皆さんから意見をいただいたおかげもあって、焼き損じもだいぶ少なくなってきたようです。

（考古部門　加藤　竜）

「土器作り教室」参加者と一緒に

地質ボランティア

今年度は昨年に引き続き収蔵庫に眠る未登録の植物化石整理作業を行ってきました。これまで153点の植物化石をクリーニング・リスト作成及び写真撮影を行い、専門の先生による同定を経て博物館化石標本として登録できました。本成果については今年度の博物館研究報告に掲載する予定です。今後も未登録植物化石の整理作業を継続すると共に、登録化石標本の写真撮影を行い、いつの日かデジタル情報を広く発信し博物館の価値を高めたいと思っています。

（地質ボランティア　五井昭一）

植物化石の整理作業